文春文庫

冬山の掟

新田次郎

文藝春秋

文春文庫　112—14

冬山の掟　定価 260円

1978年7月25日　第1刷
1980年1月15日　第3刷

著者　新田次郎

発行者　杉村友一

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　Printed in Japan

冬　山　の　掟

新田次郎

目次

地獄への滑降……5
霧の中で灯が揺れた……37
遭難者……67
冬山の掟……93
遺書……113
おかしな遭難……123
霧迷い……141
蔵王越え……161
愛鷹山……179
雪崩……199
解説　福田宏年……237

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

地獄への滑降

風が稜線のあたりに起ると、急にあたりが騒然として来て、見渡すかぎりの菅平(すがだいら)の雪原が霞んで来る。風はなだらかな起伏を越えて揺動し、ところどころに飛雪を吹き上げる。飛雪を通して太陽がうすぼんやりと見える。

飛雪がゲレンデに向って吹き上げて来ると、それはすぐ雪煙りの中に埋もれ、ゲレンデに群がるスキーヤーの色とりどりの姿が雪煙りの中に解けこんで流れる。

「ジョージさん……」

と呼ぶ女の声が、雪煙りを引き裂くように横に走ると、飛雪は嘘のようにおさまり、弱い冬の太陽が、静かな光をスキー場に投げかける。

池塚俊郎は、そのジョージと呼ぶ女の声を聞くたびに、胸になにか鋭いものを突きつけられたような気がするのである。

ジョージさんと呼ばれる男は、三名の男と五名の女に、スキーを教えていた。スキーを始めたばかりの者を相手にしての、講習というにしては、あまりにも安易な、どちらかといえば、おざなりの教え方をしているのだが、それで結構、若者たちは満足しているらしく、大股をひろげて、

屁っぴり腰で、ゆるい傾斜面を全制動の姿勢で、やっとのこと滑り降りると、

「ジョージさん、どう、これでいいの」

と、すぐ傍に立っているジョージさんに甘えるような訊き方をする女に、

「立派なものだ。今度はもう少し、身体から力を抜いてね」

ジョージさんと呼ばれる男は、立派どころか、どうにも讃めようがないほど、へたっくそな女に、そんなふうなことを言い、調子をはずして、どっこいしょと、尻餅を突いた女のところへは、走って行って手を取って起してやったり、雪を払ってやったり、締め金具の具合を見てやったりするのである。全く気障であった。

池塚俊郎は会社の友人数名と共に暮から正月を利用して、このスキー場に来ていた。リフトを利用して同じゲレンデを一日に何回となく滑り降りているうち、ふと、ジョージさんと呼ぶ声が耳についたのである。

(ジョージさん？　もしかすると、あの男ではなかろうか)

スキーがかなり上手で、女の子に親切で、そして、ジョージさんと呼ばれる男と限定すると、そう何人もジョージさんがいるとは考えられなかった。そのジョージが、麻尾譲次であるか否かをどうやって確かめようかと、池塚は考え続けていた。

風が稜線に起り、飛雪の幕が、夕陽を遮蔽すると、急に寒くなる。雪がしまって固くなり、転ぶと痛くなる。そのころになると、スキーヤーは、なにか、もの狂わしげに滑降を繰返し、冬の日いっぱいを有効に過ごそうとする。

ジョージさんと呼ばれる男の講習会は、その日の夕暮れを迎えていよいよ佳境に入ったようであった。

池塚は何気ない素振りで彼等のグループの近くに滑り降りて来ると、彼等が練習をやっているゲレンデの末端で止って、ひといき入れながら、ぼんやりと講習会の風景を見るような恰好で、彼のところに近づいて来る者を待っていた。肥った女が、不様な恰好で滑り降りて来て、彼の前で止った。

「あなたは三級ですか、四級ですか」

池塚は真面目な顔で女に訊いた。

「冗談じゃあないわ、私は初めてスキーを履いてから今日で三日目よ」

女は雪眼鏡の奥で眼を輝かせながら言った。まんざらでもない顔であった。

「とても、三日目だとは見えませんね。きっとあなたはスキーの天才ですよ。それにしても、あのコーチをしている人はたいしたものですね。きっと指導員の免状を持っているんでしょうね。あの人、外国の方ですか」

「なぜ？」

「だって、みなさんがジョージさんて呼んでいるでしょう」

女は笑い出した。

「麻尾譲次さんよ、譲次は譲るという字に次という字を書くのよ」

やはり麻尾譲次であった。だが池塚は、そしらぬ顔で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「そうですか、それは失礼しました。でも、麻尾譲次さんはプロのコーチでしょう。ぼくの会社のスキー講習会にたのみたいんだが、引き受けてくれるでしょうか」

池塚はすっとぼけて訊いた。

「プロのコーチではないわ。譲次さんは、うちの会社の人よ。でも、スキーの講習会のことなら、直接にお頼みになって見たらどうかしら。或は引き受けるかもしれませんわ」

「紹介していただけませんか。私は池塚俊郎――。染島電気製作所の人事部に務めています」

女は、池塚の顔を見た。本気で言っているかどうかを確かめているようだった。その女の眼にお願いしますと、池塚は腰を折ってたのみこんだ。

女はもどかしいほどゆっくりした足どりで斜面を登ると、明日の午後からはリフトを利用して練習しようなどと、彼を取り巻く女たちに言っている麻尾譲次のところへ行って、池塚の言葉を伝えた。

「あの人は、譲次さんを、指導員の免状を持った、プロのコーチだと思いこんでいるらしいわ。それだけではないの……ジョージさんと私たちが呼んでいるのを聞いて、外国人だと思ったんだって」

それで女たちが一度に湧いた。

「外国人だとしたら、不良外人ね」

その声でふたたびどっと湧く。

「よせよ、人聞きが悪い」

と譲次は女たちを制して置いて、その男の方へ眼をやった。ストックを腰のところで十字に組んで、頭を垂れたまま、結果を待っている池塚はなんとなく気が弱そうに見えた。

「それにしても、譲次さんはいつ指導員の免状取ったのかしら」

「ああら、あなた知らないの、今日取ったのよ、ねえ、譲次さん」

と甘えかかるような言い方をする女に、

「よせといったら」

譲次は、ややきびしい顔で言うと、女たちの囲みをすっと抜けて、池塚のところに滑り降りて来ると、

「いや、どうも」

と言った。麻尾譲次ですと自分でいうのもおかしいし、今聞いたスキーコーチの話はなどと改まっていうのもおかしかったから、いや、どうも、となんとなくとぼけた言い方で近づいて行ったのである。

「どうもすみません」

池塚は雪眼鏡を取って頭を下げた。御手数をかけて済みませんと言ったのか、スキーコーチの大先生の前で、雪眼鏡を掛けていて済みませんと言っているのか、とにかく、たいへん恐縮していることだけは事実であった。

「スキーの講習会を開きたいんですって？」

譲次は、相手が初めっから下手（したで）に出て来ているので、別に気にかけることもなく、さらりと、

目的を聞いて、その場でことわろうと思っていた。

「そうなんです。私の会社では、いままで、スキーの初心者講習会を三度やりましたが、三度とも失敗しました。あとでアンケートを取ると、全部がつまらないっていうのです。理屈が多いし、だいたい先生が威張りすぎるっていうんです。しかし、会社の方針として、やはり、スキー講習会をやるとすれば、ちゃんとした先生に基礎づけをしていただかないと、ほんとうの意味のレクリエーションの効果は出ないのだと思っています。特にうちの会社のように若い女子社員が多いところでは、きちんとするところは、きちんとしないと、けじめがつかないんです」

池塚は小さな声でつぶやくように言った。彼の言っていることは、池塚が、社員のレクリエーションを担当してはいないという点を除けば、ほとんど事実であった。

「あなたのおっしゃることはよく分ります。スキーの初心者教育ってなかなかむずかしいものです」

譲次はそこで言葉を切って、あたりを見廻してから、幾分か声を落して、

「運動神経なんて生まれたときから持ち合わせていないような女の子たちを、だましたり、すかしたりして、どうやら滑れるようにするのはたいへんなことですよ。時には、あまりばかばかしいので怒鳴りたくなることもありますが、一度でも怒鳴ったらそれでおしまいなんです」

譲次はコーチとしての腕前をちょっぴり自慢しておいて、

「なにか、ぼくにコーチを頼みたいようなお話でしたが、会社務めの身ですから、よそさまのコーチまで引き受けるってわけには参りません。残念ながら」

譲次は、はっきりとおことわりするとは言わずに、池塚の顔から視線をそらして、根子岳のほうへやった。頂上のあたりに雪煙りが上っていた。

「そうですか、よくわかりました。でもあなたほどの人がせっかくの休日を会社への奉仕で丸々つぶしてしまうのはもったいないですね」

池塚も、視線を根子岳の方へ延ばした。

「まあね。好きだから、あきらめています。しかし一応の講習会が終ったあとの一日は、ツアーを楽しむことにしています」

「ツアーをね」

譲次は根子岳に投げた眼はそらさずに、

「ツアーというほど大げさのものではないが、根子岳へ登ろうかと思っています」

「あの人たちをお連れになって？」

池塚が、その辺を勝手に滑っている女の子たちに眼をやりながら言うと、

「冗談じゃあない。あんな連中を連れて行けるものですか。一日で根子岳往復というと、かなりの体力と技術がないと……」

「そうでしょうね。私も、できたら、お供をしたいのですが、駄目でしょうか」

池塚は、一歩前に出て、二度ほど、頭を下げた。

譲次はそのときになって、はじめて、池塚に警戒するような眼を投げた。譲次は池塚の帽子からスキーにいたるまで、品定めを充分にやって、その服装が、別に変ったものでも、凝ったもの

でもなく、かなり使い古したスキー靴やスキーであるのを見て、この男は表面はいやに下手に出ているが、案外やるんじゃあないかと思った。スキーにはかなり自信があるのに、へんにもったいぶる男がいた。そういう奴に限って、なにか特別の場合にこれ見よがしに、自分の腕を披露して見せるものである。つき合いにくい相手であった。

「スキーはもう古くから？」

譲次が訊ねた。

「いえどういたしまして。この間やっと、二級をいただいたところです。二級では無理でしょうか」

池塚は、この場合も一級の腕前を二級だとわざと落して言った。

「無理ってことはないですよ。要するに、ロングウォーキングですからね」

ウォーキングのウォーを思いきり長く引っ張っていうあたりの譲次の気障っぽさは耐えがたいものがあったが、池塚は我慢した。

「それではぜひお願いします。途中まで行って、望みがないと思ったら、帰れと言って下さい。私はお言葉どおりにいたしますから、お願いします。ぼくは、いつか根子岳へ登るチャンスがあると思っていました。とうとう、そのチャンスに巡り合った。それであなたが、根子岳へ登るのは、何時でしょうか」

「明後日ですが……」

が、と後は、はっきり決めずに譲次は池塚の顔を見ていた。へんな男だよこいつは、この執拗

さはどうだろう。なぜ、こんなにべったりついて来ようとしたがるのであろうか。漠然とした不安が譲次の心の中にあったが、さりとて譲次は、その場で池塚を拒絶しようとはしなかった。

根子岳の頂に夕陽がさしかけて、雪面が輝いていた。夕暮れに近くなるに従って風はおさまったようであった。

その夜池塚は、なかなか眠れなかった。眠ろうとすると、昼間ゲレンデで聞いたジョージという女の声が耳の奥から聞えて来るのである。譲次ではなく、その声はジョージであった。頭の中にはっきりとジョージと片仮名文字が浮び上って来るのである。それは既に、彼の頭の中にしみついて取れなくなっている固有名詞でもあった。

六畳間に五人の男が寝ていた。隣の部屋では電灯をつけているらしく、襖の隙間からさしこんで来る光で、炬燵を囲むように寝ている男たちの寝顔が薄ぼんやりと見えていた。昼間の疲れで寝苦しいのか、それとも炬燵が熱すぎるのか、大きな音を立てて寝返りを打つ者がいた。誰かが、意味の通じない寝言を言うと、それに誘われるように、なにかつぶやく者がいた。

ジョージという名を妻の伊都子が口にしたのは、結婚して二月ほど経ったときであった。池塚が明け方近くに便所に立って、寝床に戻ったとき、伊都子がそう言ったのだ。池塚は、それを意味をなさない伊都子の寝言だとしていた。いつの間にか忘れてしまうようなささいなできごとであった。しかし、池塚は、それから間もなくその名を再び伊都子の口から聞いたのであった。池塚は、彼の胸の中にいた伊都子が恍惚の頂点で、ジョージ、ジョージと連呼したとき、それは意

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com